

## ESP プログラムデザイン的一般化

早稲田大学理工学術院英語教育センター

アントニ ローレンス

*anthony@antlab.sci.waseda.ac.jp*

1960年代に考案されて以来、特定の目的のための英語学習指導法 (English for Specific Purposes: ESP) は一般英語学習指導法の代案として注目されている。この指導法により、特定の談話共同体 (discourse community) のニーズを満たすため、文法、語彙形式、レジスター、学習法、談話、ジャンルを取り上げている。残念ながら、ESP の擁護者の努力にも関わらず、この指導法はまだ英語教育の世界では誤解されていることが多い。第1の問題は「ニーズ」の意味に関係している。多くの教員は学生の「ニーズ」として、文法と語彙が重要だと考えている。一方、多くの学生の最大の「ニーズ」は英会話力や英検、TOEFL、TOEIC などの英語能力試験の対策にある。このような「ニーズ」を基盤として、英語授業を構築するなら、ESP 指導法を使っているといえるだろうか？第2の問題は「特定」の意味に関係している。談話共同体 (discourse community) はどの程度特化されるべきか？ESP 指導法を検討している英語教員の悩みの元は物理学、経済学、法学などのなじみの薄い「特定」分野の専門用語の説明にある。もし、教員が「特定」分野の特徴が説明できなければ、ESP 指導法の選択は可能だろうか？

Dudley-Evans & St. John (1998)によると、ESP 実践者 (ESP Practitioner) というのは「教員」、「協力者」、「研究者」、「コース作成者」、「教材作成者」、「評価者」の重要な役割を果たさなければならない。確かに、英語教員は教科書もなく、リソースもなく、他の英語教員 (同様に特定分野になじみが薄い) からのサポートも得られない環境で「特定」分野の英語を説明しなければならないのなら、専門分野の教員の協力を得るか専門分野そのものを学ぶしかない。次に、コースをデザインし、教材を作成し、テストを作り、最終的にコースの目的を果たしているかどうか、学習者を評価しなければならない。ごく少数の有能な教員にとって、これは可能かもしれない。しかし、英語の「プログラム」を考えている学科主任や教務担当者はより深刻な問題に直面する。「特定英語コース」はいくつ必要か？このコースを誰が担当するのか？幅の広い、多彩なコースに対して、学習者の評価はどのように妥当性や信頼性を維持できるか？人材と教材にどのような影響を及ぼすか？教員研修はどれくらい必要になるか。

この発表では、まず上記の質問への回答を試みる。その次に、教育の現場で ESP 指導法をより成功させるためには、特定の専門分野を勉強している少数の上級学習者むけのプログラムとして周辺に位置づけるのではなく、プログラムデザインの中心に位置づけ、全てのコースが作成れる枠組みとすべきだと提案する。即ち ESP 指導法はプログラムの「特定」の目的を果たすだけでなく、プログラム全体の基盤にならなければならない。